

## 地区の呼び名から見る境界意識

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-02-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中川, 直柔 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/9315">http://hdl.handle.net/10297/9315</a>

## 地区の呼び名から見る境界意識

中川直柔

- 1 はじめに
- 2 由比地区の概要と住民の境界意識
  - 2.1 行政的境界と非行政的境界
- 3 呼び名による境界
  - 3.1 山と海と町
  - 3.2 同一区内での呼び名
  - 3.3 会話の中で変化した呼び名
  - 3.4 倉沢区
- 4 イメージによる境界
  - 4.1 各区へのイメージ
  - 4.2 山と海について
  - 4.3 個人的な付き合いによる境界
- 5 おわりに

### 1 はじめに

私が最初に由比という地名を知ったのは、大学 2 年生の夏に友人と東京から京都まで東海道を歩いたときだった。由比につくまでは、「由比宿の先に薩埵峠というしんどいところがあるらしいからたいへんやな」という程度でしか認識していなかった。由比を通過したときには東西に長く感じたことや、薩埵峠を歩くのがかなりきつかったことなどの方が強く印象に残っていた。そのため、フィールドワーク実習の調査地が由比に決まったと聞いたときに最初に思いついたのは、「薩埵峠や東海道に関連することについて調査したい」ということだった。その後、由比について調べていく中で、由比は東海道沿いだけに広がるのではなく南北にも広がり、様々な自然環境を有することを知った。そのような環境の中で漁業をする人や農業をする人など、住民の職業による地域の住み分けについて調査したいと思うようになった。

実際に由比でのフィールドワークで、町の人に話を聞いてゆくと、「山の方」や「町の方」といった呼び方をよく耳にした。そういった呼び名を聞いているうちに、由比の住民たちは、自分たちの住む地区とそれ以外の地区をどのように区別し、異なる地区との間にどのような境界意識を持っているのかということに興味を持つようになり、調査することにした。

## 2 由比地区の概要と住民の境界意識

ここではまず、由比の概要とそこに住む人々の境界意識について述べたいと思う。

静岡市清水区由比地区（旧庵原郡由比町）は、駿河湾北岸に位置し、その駿河湾に注ぐ二級河川・由比川は全長 7 キロメートルの急な河川である。海岸沿いの平坦な地区には人家が並び、国道 1 号線や東名高速道路、JR 東海道線が東西に帯状になって通っている。西は薩埵峠を挟んで興津（静岡市清水区興津）と接し、東は神沢川を蒲原（旧庵原郡蒲原町）との境界とし、北は富士市（旧庵原郡富士川町）や富士宮市（旧富士郡芝川町）と隣接している。また、南には駿河湾が広がり、サクラエビ漁が盛んで由比の観光産業に欠かせないものになっている。また、現在の由比区は江戸時代には東海道由比宿として栄えていたことでも知られている。

海沿いには旧東海道の宿場町として栄えた由比区、漁港を有し漁師や水産加工業者など漁業関連の生業に従事する人が多く住む今宿区や町屋原区、由比区と町屋原区の間には挟まれた北田区がある。北田区と町屋原区は和瀬川を境としている。さらに、今宿区の西にはビワの栽培が盛んな寺尾区、この寺尾区から西へ行くと倉沢区が所在する。この倉沢区は他の地区から少し離れており、以前はアジ漁などの漁業が盛んであったが現在では漁に出る人はほとんどいない。

海沿いの平坦な地区から 1 キロメートルほど北へ入ると、山がちになった地形を、東海道新幹線が横断している。ここには、東山寺区や西山寺区、阿僧区、室野区などの、柑橘類の栽培などが盛んな地域が広がる。さらにその北側の山間部には入山区という地区がある。ここでも、主に農業が盛んである。

由比町史編さん委員会編纂の『由比町史』（1989）および、『由比町史 補遺』（2008）によると、1889（明治 22）年に由比宿と他の 9 カ村（北田村、町屋原村、今宿村、寺尾村、東倉沢、西倉沢、西山寺、阿僧村、東山寺）と入山村が合併して由比町が誕生した。その際、それぞれの村が区となった。その後、1947（昭和 22）年 1 月に室野が東山寺から分離した。また、1967（昭和 39）年 4 月に東倉沢と西倉沢が合併し、倉沢となり、現在の 11 の区分け（入山、室野、阿僧、由比、東山寺、西山寺、北田、町屋原、今宿、寺尾、倉沢）になった（概要 地図 3 参照）。その後、2008（平成 20）年に静岡市と合併し、静岡市清水区の一部となった。合併のくわしい経緯などについては堀口の章を参照されたい。

このように由比地区は様々な地区が、合併してできた自治体である。そのため、それぞれの地区は異なる歴史を経て合併に至った。また、旧由比町は東西に長く、南北の奥行もあるため地理環境の面で様々な違いがある。さらに、これらのことに関係して生業も違ってくる。つまり、旧由比町は一つの自治体内で様々な環境が混在する地域である。

このように、ひとくりに由比地区と言っても地理環境や生業が異なり、生活様式は多様である。次の節では、このような多様な居住環境、生業形態を背景に住民が形成してきた境

界意識について、地区の呼び名をもとに考察していきたいと思う。

## 2.1 行政的境界と非行政的境界

境界は人々が山や川、道路などの地理環境や、住民の生活の中で自然に発生した心理的なものが作用してできる。そうしたものの中には行政によって区切られた境界とそうでない境界がある。

行政的な境界として、学校の校区や11の区分けなどがあげられる。また、11の地区の中でさらに細かく分かれている地域区分もこれに入る。地区内における境界については第3節で記述する。

由比には現在、由比小学校と由比北小学校の二つの小学校があり、中学校は由比中学校1校のみである。中学校には由比地区全域の生徒が通っている。以前は3校の小学校があった。

由比町史編さん委員会編の『由比町史』（1989）によると、小学校の校区は次のように変遷してきた。1947（昭和22）年3月、教育基本法によって六・三制教育が発足し、小学校が6年、中学校が3年となった。国民学校と呼ばれていた小学校名は同年4月から、入山小学校・北田小学校・町屋原小学校に改称し、高等科が廃止された。その後、1950（昭和25）年4月17日に町議会において、校名に地名を用いることで、児童たちの間で無意識的に部落的対立観念が生まれるのではないかという懸念から、校名の変更が提案された。その結果、校名は町屋原小学校を由比西小学校に、北田小学校を由比東小校に、入山小学校を由比北小学校に変更することになった。この時の校区は、西小は町屋原、西山寺、今宿、寺尾、倉沢、東小は阿僧、東山寺、北田、由比、北小は室野、入山となっていた。

その後、1959（昭和34）年9月1日に由比町教育委員会は小学校の児童数が減少したことから、東西小学校を統合し適正な規模にすることで、教育的、経済的な効果をあげるように町議会に求めた。その後、町当局は「東西小学校統合協議会」を発足させ、小学校を統合する方向へ進んだ。そして、1967（昭和42）年4月1日に東西小学校が統合し、由比小学校となった（由比町史編さん委員会1989）。よって現在は、由比北小学校に入山と室野の児童が、由比小学校に阿僧、東山寺、北田、由比、町屋原、西山寺、今宿、寺尾、倉沢の児童が通っている。

由比区にある由比正雪の生家と言われている「正雪紺屋」に住む吉岡統一郎さん（男性、65歳）は、小学校のときに同じ学校だった人と中学校に入ってから仲が良かったと言っていた。また、西小学校と東小学校では校風が違っていると感じていたとも言っていた。

一方で、これとは異なるのが非行政的境界である。これは由比住民同士が会話する中で使うどこかの地域をさす言葉などがあてはまる。また、海や山、道路などの地理要因によって形成される境界や農業や漁業、宿場町など生業によって形成される境界もある。これらは、普段の人々の生活の中で生まれる境界意識であり、心理的なものが関係している。

ところで、私は由比住民の話を聞いている際に気付いたことがある。それは、住民が話を

する時に、境界として意識する要因が二つあるということである。一つは呼び名であり、もう一つはイメージである。呼び名で意識される境界とは、会話をしているときにふと出た言葉や、自分の住んでいる区や他の区を示す呼び名が関係する境界である。イメージで意識される境界とは、「京都と言ったらおしとやか」というような雰囲気で感じられている境界のことである。そこで次節以降では、こうして呼び名による境界とイメージに境界よる境界について、事例をもとに考察していきたいと思う。

### 3 呼び名による境界

由比地区内で今も残る地区の呼び名について、次のような話を聞くことができた。

#### 3.1 山と海と町

由比地区の最北端で山間地域に位置する入山区に住む佐野喜則さん（男性、67歳）によると、入山の人たちは由比宿も含む海に近い地域のことを様々な呼び方で呼ぶという。入山から見て地理的に下にあるために「下町（したまち）」と呼ぶこともあり、旧東海道に近い地域という意味で「通りの方」、入山に比べて栄えている「町」であるために、「町通り（まちどおり）」、浜に近いために「浜通り（はまどおり）」と呼ぶこともあるそうだ。これらの呼び方に特別な使い分けはなく、すべてが同じ地域を指し示すものであり、入山の中でも人によって呼び方が違うとのことであった。また、入山に住む住民は「浜通り」の範囲を区別していないが、海の方に住む住民の中では区別されており、「浜通り」といえば町屋原区と北田区の境にある和瀬川橋より西側をさし、より範囲が限定されている。

また、佐野さんによると、海の方に住んでいる人は反対に山の方を、方言で田舎という意味と思われる「だいが」と呼ぶという。たとえば、喧嘩の時に海の方の人は山の方の人を「だいがさわ」とか「だいがさあ」と呼んだそうだ。この場合は悪意を持って「いなかっぺ」の意味として使うそうだが、山の方の人にはその言葉に対して言い返す言葉はなかったという。また、佐野さんは入山に住む人としては珍しくサクラエビ漁船に40年以上乗っており、今は船頭もしている。漁船の中では海の方に住んでいる人を「浜の連中」と呼んでいるという。

由比区に住む、「白雪紺屋」の吉岡さんによると次のようなことが分かった。海に近い人は山の方に住む人を「ざいの人」という。この、「ざい」という言葉は「入っている、奥まっている」というような意味の「在」という字かもしれないとのことだった。また、「いなかっぺ」という意味の「ざいごっさあ」という呼び方もあるらしい。この言葉は「在郷」という言葉から来たものかもしれないとのことだった。であるならば、佐野さんの話の中で出てきた「だいがさあ」、「だいがさわ」という言葉は、これと同じ意味だと考えられる。

ところで、「ざいが」という呼び名に関しては次のように話をしてくれた人がいた。

山の方から倉沢の方に引っ越ししてきた人の話で、子どもが「ざいごの子、ざいごの子」と言われており、その子どもがおじいちゃんに「僕はざいごなの？ざいごって悪いこと？」と聞いた。するとおじいさんが「ひな祭りを見てみる。ひな壇の上にいる人の方が偉いから高い山に住んでいる人は偉い。自信を持って」と言った。そうすると子供はざいごと言われても気にしなくなった。

このエピソードから、由比地区の住民は山に住んでいることや海に住んでいることを普段の生活で境界として意識していることが分かる。

また、これに関連したことが、静岡県教育委員会文化課県史編さん室編纂の『静岡県史民俗調査報告書第17集 町屋原・今宿の民俗―庵原郡由比町一』（1994）に記されていた。この報告書には由比地区の中でも町屋原区と今宿区についての調査の結果が載せられている。その中で4章の「内と外」では町屋原区、今宿区の世間を巡る人の動きについて以下のように書かれている。

由比のマチを中心にした周辺地域は、まず「在」と呼び、「マチバ」は、静岡・清水をさしている。「在の衆」とは、西山寺以北の山に住む人たちおよび薩埵峠を越えた興津および興津川流域の村に住む人たちをさしている。「在の衆」と呼ばれる人たちに、逆に、今宿・町屋原の地域を何と呼ぶかと問うと、「マチハラの衆」（「マチヤラの衆」）、「今宿の衆」という呼称で認識し、「ハマの衆」というような総称で呼ぶようなことはないという（静岡県教育委員会文化課県史編さん室編 1994：45）。

この記述では、今宿区や町屋原区の人たちの視点に立ったもので、私が聞いた入山区や由比区の人たちとは指し示す範囲が違う。今宿区や町屋原区の住民は「在」という言葉を使うと、由比地区内だけではなく隣の興津などの他の地域も表している。しかし、入山区や由比区の場合、「ざい」といった際には、由比地区内での山の方を指し示している。

調査をしている中で海の方に住む人は、山の方に住む人から「町の衆」と呼ばれていた。また、海の方から山の方はやはり「ざいご」と呼ぶという方が複数いた。つまり由比地区に住む人の中には山と海という意識があり、それぞれが呼び名に影響している。また、山の方を田舎、海の方を町ととらえていることや、同じ呼び名で呼んだ場合でも使う人が違えば表す範囲も違う場合がある。これは地理的な要因と共に行政的な境界とは異なった、「栄えている」、「田舎である」といったイメージによって意識された境界であると言える。次に、同じ区の中で、異なる呼び名がある事例を見てゆこう。

### 3.2 同一区内での呼び名

前掲の吉岡さんによると、由比区ではその内部でも東から順に表1のような七つの呼び名があるという。これは由比区内にある町内会の呼び名であり、住民が由比区内で場所を限

定するときによく使うという。由比地区が静岡市と合併する以前は松原や新町などの地名で呼ばれていたが、合併を機に数字を当てはめた町内会名がつけられた。由比区の外から引っ越してきた人や若い人は数字での町内会名を、比較的高齢な人が以前の地名をよく使っているという。また、現在の町内会は、以前は別々の独立した集落であったが、現在ではそれぞれの集落がつながって一つの区になっているため、境目があいまいであるということであった。

また、静岡県外から 1960（昭和 35）年ごろに嫁いできて由比区に住むようになったという望月さん（名字のみ掲載可）によると、地名を呼ぶときに由比区内では松原や本町といった呼び方をするが、由比地区内の地区を言い表すときに 11 の区割りそのままの呼び方で呼ぶことが多く、入山区のことを「ざい」と呼んだりすることはないということだった。

表 1 由比区内の呼び名

	現在の呼び方	以前の呼び方	由来
①	第一町内会	松原（まつばら）	昔、旧東海道沿いに松並木があったことから
②	第二町内会	新町（しんまち）	由比宿が端あたりに新しく集落ができ始めたことから
③	第三町内会	中町（なかちょう）	本町と新町の間にいることから
④	第四町内会	本町（ほんちょう）	由比宿の本陣があることから
⑤	第五町内会	新道（しんどう）	由比地区の北側に位置する地区は、富士宮由比線という新しい道ができたということから。 また、昔は、ここに桜並木があったために「桜新道」ということがあった。
⑥	第六町内会	入上（いりあげ）	昔、お地藏さまが浜に打ち上げられたことから打ち上げという意味の「ゆりあげ」が訛ったことから
⑦	第七町内会	貫井（ぬくい）	古地図でも「ヌクイ」とカタカナで示されていた。 この言葉には大和朝廷時代にこの地域に住んでいた民族の言葉で、湿地やぬかるむというような意味があったという。

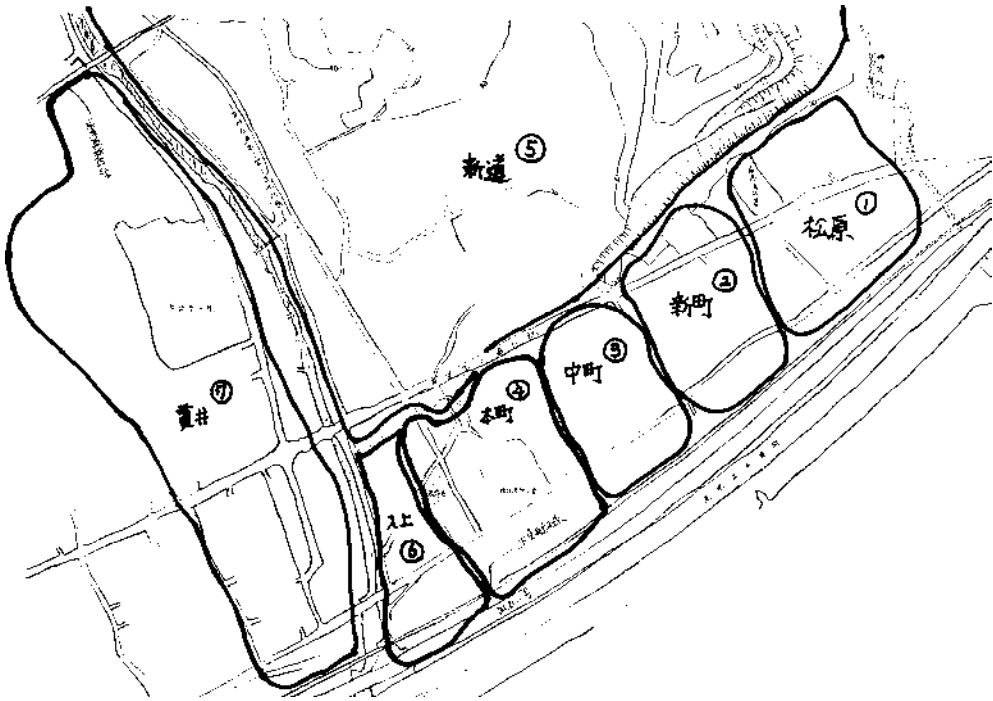


図1 由比区内の町内会（中川作成）

由比区の中で七つに町内会が分かれており、それが日常の会話な中で使われていたように、今宿の中にも西の「平（たいら）」と東の「今宿」がある。その二つが現在の今宿としてまとめられているが昔は互いに違う集落であった過去がある。そのため、過去には今宿区の区長はその二つの集落から交代で出していた、ということもわかった。

これらの呼び名はもともと、離れていた集落が一つの区とされ、その後もそのまま区内での自治会活動などに関係してきた。このことから過去の行政的境界は現在の境界意識に影響していることがわかる。

### 3.3 会話の中で変化した呼び名

ところで、前掲の吉岡さんは漁港周辺のことは町屋原や今宿といった行政的な地名で呼ぶという。その中で町屋原のことを話し言葉では愛着を込めて「まちやはら」が訛った「まちやばら」という呼び方をすることもあるとのことだった。また、話を聞いた人のほぼ全員が東山寺や西山寺は寺をとって、東山や西山というように省略して呼んでいた。

このような呼び名の変化は入山の船場でもあった。船場に住む望月俊宏さん（男性）によると、ここでは以前は「ふなば」と呼んでいたが、今日では「ふなば」と呼ぶようになったらしい。また、呼び名だけでなく漢字も変化しており、以前は「船場」と書いていたが現在は「舟場」と表すことが多いらしい。また、このふなばという地名は、昔舟を作る木材を



切り出していたことに由来すると言われている。舟場の住民の中では「ふなば」よりも「ふなんば」という呼び名の方が愛着を持ってよいという。

このことからもともとあった呼び名も日々の生活の中で呼びやすいように変化することがあり、それに対して変わる前と後の呼び名のどちらが良いかというのはそれぞれだということが分かった。

### 3.4 倉沢区

その一つが 11 の行政的な区割りで他の地域を呼ぶということである。由比地区の西端に位置する倉沢区の住民は、由比地区の他区とはやや異なった境界意識を持っている。また、「山」という言葉についても他区と異なる。由比地区で山というと、入山、室野、阿僧、東山寺、西山寺という区があげられる、しかし、倉沢においては「山」といえば、倉沢区の北の山のことであり、入山を指さない。さらに「山」という言葉の前に「寺の裏」などのように場所を表す言葉をつければ「寺の裏の山」というように特定の場所をさすことになる。つまり、倉沢のほうはより一般的な山に近い。倉沢だけこのように呼び名が違うのは、倉沢が山によって他区と隔てられていたこと要因ではないかと考えられる。

以上述べてきたことをまとめてみると次のようなことが分かる。現在の 11 の区割り、すなわち行政的な境界を使って他の場所を表す人には、由比に嫁いで来た人や引っ越してきた人など、由比地区の外出身の住民が多い。一方で、それ以外の非行政的境界は由比地区で生まれ育った人が使っている。ただし、同じ呼び名を使っている、住む場所が違えば指し示す場所が違うことがある。また、呼び名による境界は地理環境によるものが多いが過去の行政的境界の影響が残っていることが分かった。

## 4 イメージによる境界

次に由比地区における 11 の区についての住民がどのようなイメージを持ち、それが境界とどのように関連しているのか考えてゆきたい。

### 4.1 各区へのイメージ

西山寺に住む望月光雄（男性、74 歳）さんと由比から北田に引っ越してきた A さん（女性、60 代）、由比川のほとりで談笑していた男性たちはそれぞれの地区について表 2 のようなイメージを語った。望月さんは海に接する由比区以外の区は半農半漁であると語っていた。また、A さんは和瀬川橋より西側は雰囲気が変わって元気で活気があり、それより東側は静かとも言っていた。

由比川のほとりで談笑していた男性たちによると、静岡は城下町で、清水は港町で同じ静岡の中でもまったく気質が違うという。由比地区内もそれと同じように、宿と漁港のほうではまったく気質が違う。宿の人はお客様をもてなすような気質なので比較的穏やかである。

反対に、漁港の人は職業柄荒々しく元気な人が多い、とのことだった。

表 2：それぞれの区に対して持つイメージ

	望月光雄さん (西山寺在住)	Aさん(由比区から北田区へ転居)	由比川の男性たち
由比		宿場町で上品	比較的穏やか
北田	サクラエビ漁 とミカン栽培： 半農半漁	由比と町屋原の中間のような雰囲気	荒々しく元気
町屋原		漁師と勤め人が混ざっていて元気 (今宿とあまり変わらない)	
今宿		漁師の町でとっても元気(町屋原 とあまり変わらない)	
寺尾	定置網漁とビ ワ栽培：半農半 漁	農業をしていて素朴な雰囲気	農業をしている
倉沢			遠いからよくわからない
西山寺		ゆったりしている	
阿僧			
東山寺			
室野			
入山		遠いからよくわからない	

#### 4.2 山と海について

「山」と「海」のそれぞれへのイメージについても話を聞くことができた。

西山寺区の望月さんは、自身は山に住んでいるという意識がある。しかし、由比地区で同じように山と認識されている入山区とは個人的なかかわりはなく、旧由比町時代や合併後の由比地区としての行政区が同じことだけだった。昔は移動の手段が発達していなかったから生活における直接的なつながりはなかったとのことだった。

由比区に住む望月(女性、7,80代)さんは、「山」というと室野より北のイメージで、阿僧や白井沢もこれに含まれるという。また、姑が倉沢の人であったために作る料理も少し特徴的だったそう。倉沢は漁業が盛んで魚が多く獲れた。そのため、朝食の味噌汁に魚をぶつ切りにしたものや、前日の夕飯で残った刺身を入れたりすることがあった。その味噌汁は生臭くて、由比区とは違ったものであったために慣れるのに時間がかかったという。

また、由比川のほとりで立ち話をしていた由比区や北田区に住む男性4、5人からは次のような話が聞けた。「山」と「海」は村と町というイメージの違いがある。入山の方は行き来がなかったから遠く感じる。

入山区の船場に住む望月俊宏さん(男性)は、入山の住民について次のように語った。

入山は防災対策で海の方においていかれたという意識がある。そのため、自分たちで何とかしようとする意識が高まった。また、海の方の人から「上から目線」で接せられることが多いため見返してやろうとして団結力が強くなった。「山」に住むことについて強い気持ちを持っていた。

このように山と海というイメージは由比住民の中に強く根付いており、それが境界意識にも表れていることがわかる。山よりも海のほうが榮えているといったイメージは由比地区の住民が共通に持ち、それに対して思うことはそれぞれの場所によって違うことが分かった。

言葉づかいについてもいろいろな話が聞けた。入山区の佐野喜則さん（前掲）によると、入山は言葉がきれいであるのほうは汚いとのことだった。これは、漁師の人の影響だという。船の上で仕事をする漁師は小さい声で話しては聞こえないからどうしても言葉が荒くなってしまうのではとのことだった。

由比区の吉岡統一郎さん（前掲）も次のように話した。小学校ごとの校風も親の職業の違いから違っており、西小は漁師の子どもが多く通ったため気性が激しく、東小は農家や旧由比宿の子どもが多く通っていたためおだやかという印象だったという。また、吉岡さんの親の代では北田小学校（今の東小）を「由比の学習院」と呼ぶ冗談もあった。

#### 4.3 個人的な付き合いの境界

西山寺地区の望月光雄さん（前掲）は移動手段がなかったことなどが理由で、小学校の校区ごとでの仲間意識が強いと語っていた。吉岡さんは、昔は小学校の校区ごとで仲間意識があったが、小学校が統合したことで最近の人たちは仲間意識が薄れつつあるのではないかと語った。また、由比川のほとりで立ち話をしていた男性たちは、小学校の校区での仲間意識が強いが、中学で一つの中学校にまとまってもわだかまりはないと語っていた。また、地区ごとの祭りは互いに協力しておこなっている。例えば、町屋原のお太鼓祭りは、中心になってやっているのは町屋原の人だが、由比宿の人たちも盛り上げに行く。反対に由比の八幡様のお祭りも祭りの中心は由比の人だが町屋原の人が盛り上げに来てくれる。このようにお互いに助け合う部分もあるということだった。

以上述べてきたことをまとめると、イメージによる境界について次のことが言える。イメージによって作られる境界は人によって違いがあるが、生業に起因するイメージがその要因として大きなものになっている。その他には、小学校の校区も要因の一つである。さらに自分の住んでいる区から遠い区に対しては詳しいイメージはあまり持っておらず大雑把に「山」や「海」といったイメージでとらえている傾向にある。イメージによる境界は日々の生活の中から感じることでできる雰囲気や言葉遣いなど非行政的な境界である。

## 5 おわりに

由比地区内はもともとばらばらであった1宿10カ村が合併してできた自治体で、地理環境も多様であるため、様々な生業に従事する人がいる。区ごとの住民が各々自分たちと他者を区別する境界意識をもっており、それは呼び名やイメージに表れていた。

今回、話をしてくれた住民のほとんどに共通した語りがある。それは、昔に比べて、今日では境界意識がかなり薄いものになっているというものだった。そのことに関して、次のような要因が考えられる。

一つは、移動手段の発達である。以前は移動手段があまりなかったために、自分の生活圏とそれ以外という境界が多く見られた。しかし、近年、車などの移動手段が発達したおかげで、住民たちは自分の行きたいところに不自由なく移動できるようになった。これにより、生活圏が広くなり由比地区内の境界は意識されにくくなったのだと思う。

二つ目は、旧由比町から静岡市清水区由比地区となったことである。この合併以前は、旧由比町内で違いを意識することがあった。しかし、それが大きな静岡市という自治体の一部となったことで、旧由比町と静岡市、旧由比町と清水区といった外との違いを意識するようになり、由比地区内での境界意識が薄れていったのではないだろうか。また、由比地区では若い世代の住民が減り、由比地区内の住民が祭りなどに代表されるように区を超えて互いに協力していかなければならないことなどが増えたことも、境界意識が薄くなった要因となったのではないかと思う。

以上、本稿では由比地区内での住民の境界意識について、地区の呼び名やイメージ、行政的境界と非行政的境界をあげながら考えてきた。呼び名による境界は地理環境に起因して作られたものが多いが、過去の行政的境界の影響も残っている。反対にイメージによる境界は日々の生活の中で実感できる雰囲気や言葉遣いなどの非行政的境界であり、生業に関するイメージや小学校の校区が要因であるといえる。

## 謝辞

今回、いたらない私に笑顔で様々な話をしていただいた由比地区の住民の方々、調査に協力して下さったすべての方々に感謝いたします。

## 参考文献

由比町史編さん委員会編

1989 『由比町史』 静岡県由比町教育委員会。

2008 『由比町史 補遺』 静岡県由比町教育委員会。

静岡県教育委員会文化課県史編さん室編

- 1994 『静岡県史民族調査報告書第十七集 町屋原・今宿の民俗—庵原郡由比町—』 静岡県。